

家具よもやま話 No.5

小長谷 光

今回は「図面表現」と、一つの家具の中に混在する「様式」がテーマです。紙面に限りがありますので、図面が小さく見にくいと思いますが(A)~(F)の部分について注目していただければと思います。

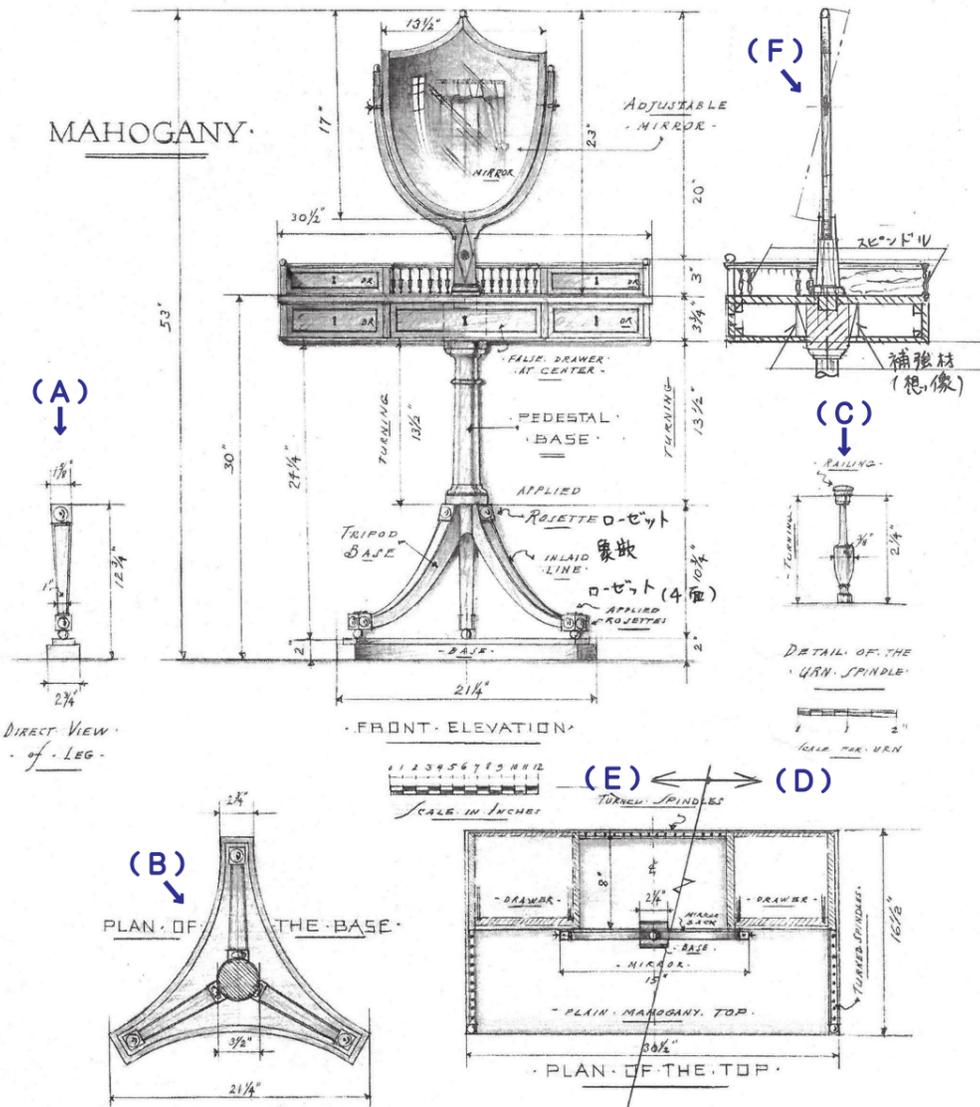
ストックホルム、ノーザンミュージアム所蔵のこのすばらしいマホガニー製のドレッシングテーブルは、およそ1830年代のもので、W774×D419×H762×TH(総高)1.346の小さなものですが、多くの様式の影響が見られます。盾形の角度調節式のミラーはまぎれもなくヘッブルホワイトで、ペDESTAL(柱脚)部はアンピール、その下にベース板はビーダーマイヤー(ドイツ、オーストリアにおけるアンピール)、本体のテーブルは明らかにシェラトンの精緻さが見られます。しかし、これらの要素が

ありながらまとまっているのは全体を通してネオクラシズムの流れがある結果と言えます。

おもしろいのは天板下の三つの引出しで中央はダミーです。これはミラーの支柱とペDESTALが天板を挟んで柄入れすることで強度を得るためで、表現はされていませんが、このダミーの引出し内部にはテーブルトップの安定性のため外にも補強がされているはず(断面図は筆者補完)

全ての引出しにはツマミがなく、鍵穴の口金がついており、出し入れは鍵で引き出すタイプだったのでしょうか。おそらくこのクラスのドレッシングテーブルは高い身分の女性が使用していたもので、鍵付になっているのは使用人を信用しておらず、アクセサリーや化粧品を守るためだったのでしょうか。

DRESSING TABLE - Circa 1830 NORTHERN MUSEUM STOCKHOLM



図面の表現は平面の向きを見れば三角法ですが、各図の配置はバラバラです。
(A)は三脚部を正面から描き
(B)はベースを含む三脚部平面です。
(C)は天板上の左右手前と中央奥にある壺形のスピンドル(紡錘形挽き物)の詳細図で、拡大した縮尺で表現されています。写真では1本欠落しているスピンドルが図面では補われています。
平面図の表現は図法とは少し違う表現で、ミラーフレームは外観で、その下の天板上の引出しやスピンドルは平断面的な表現です。いずれも分かりやすくすることと紙面上のレイアウトを考えた上でのことでしょう。
もし私がこの平面を描くのであればセンターラインから半分弱(D)は断面で描き、その他(E)は外観にするでしょうし、ミラーの支柱の側面(F)も表現したいところです。

Measured & Drawn by Lexter Margon



大阪府インテリア設計士協会
〒541-0059 大阪市中央区博労町1-6-14
TEL. 06-6262-1488 FAX. 06-6262-1553
URL <http://jp-interior.or.jp/ois>
E-mail ois@jp-interior.or.jp
facebook 「大阪府インテリア設計士協会」

発行人：河野 洋二
編集：OIS 第1事業部会

活気 No.109

2020 初詣と新年会



令和初の「OIS初詣・新年会」を1月12日、お初天神(露天神社)で開催しました。
参加者16人、拝殿でOISの発展と会員皆様の活躍と健康を祈念するお祓いを受け、河野会長が代表して玉串奉奠、お神酒をいただいた後に記念撮影を行いました。
その後、近くの「がんこ曾根崎本店」に移動して新年会を行いました。
ビールで乾杯の後、食事を楽しみながら歓談しました。新年会では、21文字の「回転しりとり」や、なるほどと得心するような「川柳」で盛り上がりました。
最後は恒例の大阪締めでお開きになりました。



HASHIRIGAKI

葉知利書



年頭所感 会長 河野 洋二

平成から令和に変わり初めての新年を迎えた2020年は東京で2度目となるオリンピックが開催されます。海外からたくさんの方が押し寄せ日本中大いに活気づくでしょう。
また、2020年は子年。十二支のスタートで、草木の生命をはじめとした命が誕生しようとする意味もあるそうです。皆さんも何か新しいことを始めるといいと思います。普段仕事で忙しくしている人も少しゆとりをもってチャレンジしましょう！
この新しい年が、より佳き年になるよう心より祈念致しまして、私からの年頭の挨拶とさせていただきます。



篆刻教室に参加して 2019.12.3

今回は初めての人が多く、少し緊張した雰囲気から始まりました。
宮後先生から篆刻の歴史、文字の変遷のお話を聞いた後、早速彫り始めると、ガリガリと石を彫る静かな音と時々「あっ！」という声が飛び出します。慎重に彫り進めてもつい大切な部分を彫り落としてしまいます。用心深くなると線は浅くなり、印の用をなさなくなってしまい、お手上げ状態です。宮後先生は大胆に彫るよう言われるのですが、何回挑戦しても美しい線はなかなか彫れません。今回は干支の「子」に挑戦しました。尻尾を思わせる部分もあり愛らしい小篆文字の鼠です。

篆刻教室に参加して、改めて作ることは楽しいな、と思いました。器用ではありませんが、もの作りは心を開放し、心を収めてくれます。
子どもの頃から、ものを作っている人の手元をみることも好きでした。ふと近所の和菓子屋さんで、店頭であん巻きを作っていたのを思い出しました。おじさんが鉄板に生地を均等に流し、色づいたところにタイミングよく餡をのせ、ヘラでくるりと巻き込んでいく様子を飽きずに眺めていました。焼きあがる甘い香りとおじさんの手元が懐かしく思い出されます。
みなさまにもきっと子どもの頃、何かできあがる過程をじっと見つめていた経験があたりではないでしょうか？最近、おじさんはクレープも焼き始め、昨今はこちらが人気のようです。作り手は常に新しいことに挑戦することが大事ですね。



2020年、私はものづくりを楽しむ時間を持ちたいと思います。もの作りを通じ、子どもたちには創造する楽しさを、私たち大人は脳の活性化が期待出来ますね。
(記・今井 和子)

OISの回想録(1)

私は大学卒業後、佛高島屋工作所(現在の社名は高島屋スペースクリエイツ株)に入社して14年目の昭和57年(1982年)に社団法人日本室内装備設計技術協会認定、1級室内装備設計士(現在の一般社団法人日本インテリア設計士協会、1級インテリア設計士)を取得し、大阪室内装備設計士協会会員となりました。

資格を取って初めて参加したのが、証書伝達式を兼ねた「忘年会」の時でした。会場では、会長をはじめ理事の方々は設計・デザイン・生産・施工・家具販売など、インテリア関連会社の経営者や管理職と教育関係の先生方が多く、学校や会社とは全く違う雰囲気を感じていました。その後、協会のなかでは会社などのような上下関係はほとんどなく、会員として皆同等に対処できることが次第にわかってきました。多く企画される行事などに積極的に参加しているうちに、先輩の方々は学校や会社では学べないいろいろな知識や技術と自分の知らない世界や人生のことまで教えていただきました。

特に、新入会員や若い会員の方々に言いたいことですが、まずは親睦から入るのが一番良い方法だと思います。それによって自然に人の輪が広がり、自分にとって必要な情報を得ようとすればいくらかでも得られると思います。資格を取得しただけでは何の意味も効果もありません。資格を生かすためには多くの人との繋が

※今号からOIS足田顧問による協会の回想記事を連載します(編集部)

顧問 足田 友一

りを持ち視野を広げ、インテリア設計士としての知識や技術のレベルアップをすることが重要だと思います。若い方々はインターネットやスマホなどからの情報に慣れ親しんでいると思いますが、人と直に会って情報交換したり、セミナーや現場見学することから得られる新しく実質的な知識や技術はすべて自分の宝となり、それが日常の快適な生活や実際の仕事に生かされる時が必ず来ます。

私は会員となって今年で38年目を迎えますが、OISの会長やSJIT(日本インテリア設計士協会)の会長もさせていただき、インテリア設計士テキストの編集にも携わり、さらに会社に勤務しながら協会からの推薦で大学や専門学校の非常勤講師もすることができ、充実した人生を送れたことを心から感謝しています。

次回からOISで経験し、皆様に伝えたいことについて、いくつか紹介させていただきます。



【会長在任期間】 OIS平成13年~18年 SJIT平成21年~29年

京都府インテリア設計士協会 **KJIS企画** 津島のお茶室探訪 2019.11.10

「津島のお茶室」何それ? が、正直なところ案内を見た最初の感想だった。今までのバスツアーと比べても渋めの印象。ところが結果は「人の行く裏に道あり花の山」と言えよう。大収穫の1日となった。その顛末を。



OISからは6人の参加。津島市文化会館に到着後、まず愛知県インテリア設計士協会会長伊藤千加志氏より講義を受ける。みっちり1時間以上。同氏は津島の茶室研究の第一人者だったのだ。しかも地元出身とあって、途中から市長(建築設計畑の出身とか)も同席されるハイレベルな中身。

早朝に家を出た私は空腹も手伝い、時として頭が追いつかないことも。そして待望の昼食タイム。座学形式の

席配置ながら美味は美味。松花堂弁当とお寿司の豪華版をいただく(残念ながらアルコールはおあずけ)。

午後からは地元ガイド氏が勢揃い、参加者総勢約40人が三班に分かれ、秋晴れの空の下、茶室4カ所を巡るツアーが始まる。

古民家や歴史街道を探訪しつつ、織田信長以来の歴史も交え、茶文化を支えた土地柄を語るガイド氏は欠かせない役者だった。最後は津島神社の参拝で締めくくる。

ここで私はにわかファンになって一言。「街道もあり見所満載の津島には、どえらい天王祭もあるですよ」。(記・塚口 眞佐子)



令和元年に合格された皆さんおめでとうございます

※今回は入会2年目までの人に声をかけています

新会員中心の親睦会を12月21日(土)に行いました。青年有志の新企画です。

会場となるお店は心齋橋「空色カラー」。店に入ってすぐ居心地のよさそうな掘りごたつがあり、奥に進むととてもおしゃれな洋風インテリアのソファとテーブル席が並び、感じのよいお店でした。

18時半に乾杯の合図でスタート。クリスマス気分です。サンタやトナカイの帽子をかぶった新会員さんに、一人一人に予め質問を書いた内容に答えてもらいながら、自己紹介をしていただきました。

2時間半という短い時間ながら、新鮮な魚・肉・野菜のたっぷりつまった鍋料理を味わい、新会員さんからまだお会いできていない会員さんとも繋がれる楽しい企画の種を多くいただき、食事が動きました。

春には、新しい企画を届けたいと思っています。

(記・来藤 澄江)



2019 事遊展 & 忘年会 からほり悠で開催

恒例のOIS事遊展 & 忘年会を昨年12月13日(金)に古民家「からほり悠」で実施しました。参加者は17人、1階で忘年会、2階は「事遊展」会場です。

今年の題は「サムホール」、広義には小さな作品がテーマです。全部で14作品が集まりました。

忘年会の前に、2階に移動し、出展者から作品についての説明を受け、皆で人気投票をした結果、サムホール部門最優秀賞は高橋顧問、事遊展優秀賞に小長谷さんの作品がそれぞれ選ばれました。

忘年会は会長と女性会員の協力でお好み焼きが提供され、また、ピンゴゲームで盛会のうちに終了しました。(記・事務局)



「フィメールたち」高橋 宏至



「NewYork Pilot Boat」小長谷 光

奥田さんの出展作品、12月8日に実施した藤井厚二「聴竹居」見学会写真です。



【手玉に取る】…写真の技法の一つに「宙玉(ソラタマ)」というのがあり、宙に浮かぶ玉に光景が映ったかのように見えます。私はその玉を手で持ってみました。指、背景及び球体写真はPCでの合成です。(記・奥田 忠彦)

映画とインテリア No.3 今井 俊夫

今回ご紹介するのは「チップス先生 さようなら」(1969年版/アメリカ)。原作はジェームズ・ヒルトンの同名小説(1933年刊)。主演はピーター・オトゥール、ペトゥラ・クラーク。ミュージカル仕立ての映画です。原作では19世紀後半の晋仏戦争から第一次世界大戦前後の出来事ですが、本版は第二次世界大戦前後に時代背景を変えて反戦映画のリアリティを持たせています。

舞台はイングランド南部の小さな町、ブルックフィールド。伝統あるパブリックスクールにラテン語教師として勤めるアーサー・チップス、通称「チップス先生」は教育熱心ではあったが、生徒たちに妥協はしない堅ぶつでした。チップス先生は夏休みにイタリア旅行に出かけた折、ロンドンで一泊し女優のキャサリンと知り合います。その後、ポンペイ遺跡で偶然に再会した2人はたちまち恋に落ち、結婚します。映画の前半は二人の幸せで充実した生活が描かれ、生徒にも寛容になるチップス先生の変貌ぶりが見所です。

ところが、戦争になり慰問に出かけたキャサリンが不幸にも爆死し、チップス先生は再びひとりぼっちになります。悲しみ、落胆するチップス。教育者としてその苦難を乗り越え、淡々と生徒たちに接するチップス先生に対し

て皆が次第に尊敬の念を抱くようになります。子供がなかったチップス先生は、晩年「何干という教え子は皆、私の息子たちだ。」と回想するシーンが印象的です。

さて、インテリアに関していえば、独身時代のキャサリンが住んでいた家は、「ジョージア朝」の建物でした。イギリスでは18世紀中ごろから「産業革命」により近代化が急速に進み、ジョージ1世~3世の時代、ロンドンなどの都市部に人口が集中します。限られた土地に効率よく住宅を造ろうとすると、必然的に「テラス・ハウス」や「タウン・ハウス」と呼ばれる集合住宅が発達しました。この時代、合理的でシンプルな構成のものも多く、これらは「ジョージア王朝」の長屋住宅として後に英国内で広く普及します。1837年にはヴィクトリア女王に治世が変わり、イギリスがもっとも繁栄した「ヴィクトリア朝」の時代に続きます。

ロケで使われたキャサリンの家は、googleで検索するとテムズ川畔に今も実在します。(写真参照→)

チップス先生- は1939年版(ロバート・ドーナット主演)映画も名作です。暫くDVD二本を事務局に預けますので、是非見比べて下さい。

